

A close-up photograph of cherry blossoms. The image shows several white flowers in various stages of bloom, with prominent yellow stamens. A single, unopened pink bud is the central focus, attached to a green stem. The background is a soft, out-of-focus blue sky. The text '蚊のぴっか' is overlaid in pink, and 'はしもとケチャップ' is overlaid in brown at the bottom.

蚊のぴっか

はしもとケチャップ

ぶ～ん ぶ～ん 先輩～

ぼくは蚊のぴっか
空をとべるようになってから
まだ ろくにご飯をたべてない
今日は 先輩の後につづいて
ご飯を食べにいくんだ
とっても楽しみ

「シェっ蚊さん よろしくおねがいします」
「おう。でも自分の身はじぶんでまもるんだよ」
「うん、、、。??」
「まあいいや ついておいで」
「はい」
「まずは俺の行動をよくみるんだ」
「はい」

シェっ蚊はマンションの2階に飛び
ベランダの網戸の隙間から侵入する。

ぶーん ぶーん ちく
「うん うまい」

僕は、先輩がご飯を食べているのをみている。
そして、10秒もしないうちに先輩はもどってきた。

「どうだ？ これが基本だ」
「むずかしそうです、、、。」
「そうだな。初めてだとおっかなびっくりだろう」
「でもお腹がすきたので 行ってきます。」
「おう、助けには行けないからな、ここでまってるよ」
「行ってきまーす」

ぶ～ん ぶ～～ん なかなか刺さらない、、、。

ぶ～ん ぶ～ん ちく スポ！ ちく すぽ！
「とれちゃうよ～」

「ぴっかよ 戻って来い 気づかれたぞ」
「えっえっえ わあ～」

シェっ蚊が助けに行く。

ぶーん ぶーん ぶんぶーん 「わあ」 ぱしん！！
ぱしん！！ ぶーん ぶ～ん 「逃げろー」

ぴっかは シェっ蚊のアクロバットな飛行に助けられた。

「助けてくれてありがとう。わ～ん」

「お前には 早すぎたな、。」

「わるかった、今度はもっともーっと小さいのにしよう。今日は俺のたくわえをやろう」

シェっ蚊は腰袋の中身をあげた

「ありがとう。じゃあ 遠慮なく」もぐもぐ ごっくん

「ご馳走様でした。」

フレッシュジュース？

とってもやさしい先輩のシェっ蚊は ぴっかに近づいてくる

「ぴっかよ お腹がすいただろう 今日はお前に極上の獲物をおしえよう」

ぴっかはきらきらした目で先輩を見る

「なんでしょう・・・まさか、死んだ獲物ですか？」

「ばか！逆だ！フレッシュ フレッシュ。」

「ふれっしゅ ふれっしゅ とは・・・??なんの事でしょうか」

ぴっかは目をぱちくりする。 ぱちくり ぱちくり

「着いて来い。おどろくぞ～ ふっふっふ」

あやしい、、とっても気になる、、ぴっかは独り言をいう

ぶ～～ん ぶぶ～～ん ぴと

前に行ったことあるマンションの違う部屋にたどり着いた

ベランダの物干し竿にとまり、中をのぞく

「あれだ」

「あれは、赤ちゃんではないですか」

「そうだ！！ あれこそが我々の最高のご馳走 フレっちゅジュース、そして一度食べたら忘れられない、100%雑味なしのフレッシュジューちゅ」

シェっ蚊は羽をぶんぶん言わせ舌をもつれさせながら話す。興奮しているのだ

「生まれたてで、新鮮そう！！」

ぴっかも興奮している

「さぁ 食べに行こう！！ っと言いたいところだが、少々難点がある」

シェっ蚊はむずかしそうな顔をする。

「難点とは、、、？」 ときどきとき

「よし、、しっかり聞くんだぞ・・・」

「はい」ときどきとき

シェっ蚊は静かに言う

「いったん吸うと・・・うますぎて・・・その・・・やめられない・・・つまりだな、我を忘れてしまう。すなわち、危険と隣り合わせなのだ」

「ぼくもその極上をひとつ、一度でも食べてみたいです、シェっ蚊さん」

「もちろんだ ぴっかよ。」

「では、作戦会議だ」

二匹は物干し竿の端っこに行き、こそこそと話し合う。

基本は一匹ずつ食事をする。もう一匹は近くに待機。

もちろん食事時間は10秒以内。これ以上は危険。

もし我を忘れて10秒以上食事をしようものなら、もう一匹が助ける。

そして交代する。以上

作戦会議がおわり、二匹は網戸の隙間から侵入する。

「よし、まず俺が行ってくる。ぴっかはすぐそばに待機だ」

「了解です。気をつけてくださいね。」

ぶ～ん ぶぶ～ん ぴた。 ちく。

ちゅうちゅう・・・ちゅ～う・・・ちゅう・・・はあはあ・・・ちゅう もう一口・・・ちゅ！
バシ！！

ぴっかのとび蹴りがとんできた。

「シェっ蚊さん 13秒ですよ。早く逃げましょう！！」二匹は急いで物干し竿にもどる。

「はあはあ、、危うく我を忘れるところだった、それにしてもいい蹴りだったな。先輩に手加減もなく・・・」

「すみません。だって先輩、目が血走っていましたよ」

「気づいていたか、久々だったからつい。」

ガラガラ～ピシャ ピピー カラカラ～ウィー

「先輩！！窓が閉められてしまいました。」

「エアコンを入れたんだらう、危うく出られなくなる場所だったなあ。」

「せ・せんぱい・・・僕・・・食事してません・・・え・ええ～ん」

ぴっかは泣いてしまった。シェっ蚊はおろおろする。

「泣くな泣くな、また来ればいいだらう。ほれ、俺の蓄えをやろう」

ぴっかはまた、シェっ蚊の腰袋の蓄えをもらう。

「じゃあ遠慮なく。でもご馳走が・・・たべたかったなあ。」

遊びに行くぞ～！？

夏の夕暮れ時、ぴっかは学校の前にある大きな桜の木の葉っぱに隠れている。

いつものようにシェっ蚊がぴっかの元にやってきた。

「おう！ぴっかよ、またそこにいた。おなかすいただろう。」

「はい！シェっ蚊さん。ここは涼しいですから。はて、今日はどこに行くんですか？」

シェっ蚊は怪しい目をする。 ふふふ

「ぴっかよ、これから遊びに行くぞ。」

「海ですか？山ですか？プールですか？・・・ご飯ではなくて？」

「ご飯を食べながら、遊ぶのだ。ふふふっ」ぶ～ん

「一石二鳥ですね。ふふふふっ」ぶーん

シェっ蚊とぴっかは空中ダンスを踊っている。

ぐう～ぐぐう～。

「その前にぴっかよ、腹ごしらえをしようじゃないか」

「はい、シェっ蚊さん。腰袋くれるんですか？」

ぴっかは目をキラキラさせてシェっ蚊をみる。

「いいや、ここにあるではないか。たまにはいいぞ、樹液は」

シェっ蚊は近くの木から出ている樹液を吸う。ごくごく・・・ごく。

「ぴっかよ、食べないのか？」

「ぼく、いつも樹液なんです。まだまだ一人では食事に行けなくて」

ぴっかは目がうるうるしている。

「そうか、すまん。これやるぞ。」

シェっ蚊は腰袋の蓄えをぴっかに渡す。

「では、遠慮なく」ごくごく・・・ごくごく。うまい。

「シェっ蚊さん、ごちそうさまでした。」

「おう、がんばれよぴっかよ」

そして、二匹は目的地の一軒屋に向かう。ぱたぱた・・・ぶぶ～～ん

学校から少しはなれた森の近くの一軒家に、シェっ蚊とぴっかは着いた。

「ついたぞ、ここだ」

ぴっかは鼻をくんくんする。

「木のおいがすっごくする家ですね。」

「そうだろ、そうだろ。まあ俺のうちではないがな」

さっそく二匹は、二階のベランダから進入する。

そこは子供部屋だった。一人少年が寝ている。手足が無防備だ。

「ぴっかよ、我々もただ食事をするだけではつまらんからな。今から面白いことをするからな」

」

「はい、お願いいたします。」

シェっ蚊は子供のすぐそばまで飛んでいき、ひとまわり様子を見てからぴっかのところに戻ってきた。

「ぴっかよ、やつは熟睡している。しっしっしっ。じゃあ俺が両足の指をちくっとやるからな、みてるよ」

ぶ〜ん ぱたぱた ちく ちゅう。 ちく ちゅう。ぱたぱた ぶ〜ん

「ぴっかよ、お前の番だ。両手の指先を狙うんだ。ついでに食事もしておけよ。」

「はい、シェっ蚊さん。」

ぶ〜ん ぱたぱたぱた ちく ちゅうちゅう〜う。 ちく ちゅう〜！！

子供が寝返りを打った。ぴっかはすんでのところで飛び、唇の上に止まった。

「はあはあ、危なかった。ん？なんかやわらかくておいしそう、えい！」

ちく ちゅうちゅう ちゅうちゅう ぷはあ ぱたぱた ぶ〜ん

シェっ蚊のところに戻る

「ぴっかよ。見事であった。唇を狙うとは・・・成長したもんだ。」

シェっ蚊はうるうるしている。

「なんか、やわらかくてよかったです。」

「これからやつは暴れるだろうから、あそこに退散だ。」

シェっ蚊とぴっかは、カーテンレールの上に止まり、子供をみている。

しばらくすると、熟睡していたはずの子供は、もそもそと動き出した。

そして、足を搔くために海老みたいに腰をまげ変な格好になって一生懸命に搔いている。

「はっはっはっは。」「なんだあれ〜海老みたいだ」

シェっ蚊とぴっかは共に笑い、喜んでいる。

今度は両手の指先を搔きながら、足も搔き、手が足りていないようだ。

「へっへっへ、かゆそうだな。」

シェっ蚊は怪しい目になって、おもしろがっている。

子供はやっとのことで起きだし、近くに置いてあったかゆみ止めを塗り、唇にも塗ろうかまよって、何かを言っている。「唇さされたよお〜かゆいよ〜ぬれないよ〜パパ〜」

子供は一目散に一階へと降りていった。

シェっ蚊とぴっかは笑いすぎて、カーテンレールから落っこちそうになる。

「おととと、あぶない。それにしても笑いすぎた、よくやったぴっかよ」

「面白かったですね。あんなになるなんて。さっき、あの子は何て言ってたのでしょうか？」

「おお。そうだそうだ、あれは唇にかゆみ止めを塗ろうかまよって、きっと怒ってたんだろ
うな」

「かゆみ止め苦そうですもんね。」ぴっかも苦い顔をする。

「さあ、親が蚊取り線香もって来る前に帰るぞぴっかよ」

「はい、シェっ蚊さん。ぼく蚊取り線香すきですけどね。」

シェっ蚊とぴっかは、急いで帰路に着いた。

「ぴっかよ、蚊取り線香は身体によくないぞ。気がついたら天国だ」

「ええ！！じゃあ あれは畏だったんですか・・・また遊びに行きましょうシェっ蚊さん」

「おう、ぴっかがその気ならまたいこうではないか」

シェっ蚊はぴっかの頭をなでながら、仲良く飛んでいった。

ぶ～～ん